

# 漂流記蕃談に関する考察

高瀬重雄

## 一

江戸時代の鎖国の代における日本人の海上漂流の物語は、一般に漂流記とよばれる記録として、すくなくらず今日に残されている。

しかしそれらの漂流記の多くのものは、明治維新以前においては、極めてわずかな写本として秘蔵されるのが常であり、従つて限られた少数の人々によつて、その存在が知られているにすぎなかつた。

天保七（一八三六）年八月、栄力丸に乗つていた播州浜田の漁夫彦蔵は、相州沖の難風にあつて遠く太平洋上に漂流した。やがてアメリカ船に救助され、アメリカに帰化してジョセフ・ヒコ（Joseph Hiko）と名のつた彦蔵が、九カ年の歳月の後、タウンセント・ハリス（Townsend Harris）の通訳官として日本に來朝したのは、周知の事實である。そしてこのことの顛末は、彦蔵が自ら記した漂流記一卷として刊行された。彼のこの原書には、刊行の年月を記していないけれども、多分文久三（一八六三）年の自費による出版であらうといわれている<sup>①</sup>。

この彦蔵の漂流記は、それが明治以前に刊行されたほとんど唯一の例であつて、その他の多くの漂流記は江戸幕府の海外知識の普及を抑圧しようとする政策の影響もあつて、全く刊行されるには至らなかつた。鎖国の時代には、漂流記の多くのものが、筐底または文庫の奥深く秘められていたということが出来る。

しかるに明治以降に至つて、事情が著しく異つてきた。まず第一に、これら漂流記の写本を捜し求めて、これを印刷に附することが行われはじめた。次いで第二に、特定の漂流記に関する詳細な考証を行うものがあらわれた。さらに第三には、鎖国の時代における海外交渉の史料、またはこの時代における海外知識や海外地誌の資料として、漂流記の記述を史学並びに地理学の研究に利用する傾向を生じた。またこれとは別に、漂流記に素材を求めるところの創作があらわれて、漂流記に対する関心は、明治以降次第に昂まつてきたといわねばならぬ。

たとえば石井研堂氏が校訂した漂流奇談全集や異国漂流奇譚集、清水文雄氏の韃靼漂流記<sup>①</sup>、柴義夫氏が出版した南海漂流譚<sup>②</sup>、等は第一の部類、すなわち江戸時代漂流記の集録刊行の例としてあげられるものである。

また亀井高孝教授が詳細な解説をつけて出された北樵開略<sup>③</sup>、園田一亀氏による韃靼漂流記の研究<sup>④</sup>、また竹尾式氏の解説をつけた北樵開略<sup>⑤</sup>、等は特定の漂流記に関する考証並びに研究として、第二の部類に属するといふことができる。

さらに内藤湖南博士が、韃靼漂流記の記載をもつて、日本と満洲との交通史料とされたとき<sup>⑥</sup>、新村出博士が、北樵開略の記述をひいて伊勢漂流の事蹟と題する論文をかかれ、鎖国時代における日本とロシアとの交渉史料とされたとき<sup>⑦</sup>、同じ漂流記を資料として吉野作造博士が露国帰還の漂流幸太夫と題する著書を公にされたときは、漂流記の記載を歴史研究の史料として用いられた場合であった。また鮎沢信太郎博士や岩根保重氏は漂流記のうちには外国地誌とみなすべき部分があるとして、日本地理学史の史料とされたのであつて、これらはいずれもここにいう第三の場合、すなわち漂流記を史料または資料として、史学並びに地理学の研究に利用された例であつた。

なお別に、井伏鱒二氏には小説ジョン万次郎漂流記及び漂流宇三

郎の著があり、前者は昭和十二（一九三七）年の直木賞を、後者は昭和三十一（一九五六）年の日本芸術院賞をうけている。これらは漂流記を素材として創作された小説であつた。

かようにして、江戸時代には深く秘められていた漂流記は、明治以降ようやく明るみにもち出され、研究の対象または創作の素材として脚光をあび、漸次人の注目をひくようになってきたといふことができる。

① 文明源流叢書、第三、緒言二頁、その他アメリカ彦蔵自叙伝、ハリスの日本滞在記等参照。

② 石井研堂氏、校訂漂流奇談全集（明治三十三年、博文館）及び異国漂流奇譚集（昭和二年、福永書店）

③ 清水文雄氏、韃靼漂流記（昭和十七年、春陽堂）

④ 柴義夫氏、南海漂流譚（昭和十八年、双林社）

⑤ 亀井高孝氏、北樵開略（昭和十二年、三秀社）

⑥ 園田一亀氏、韃靼漂流記の研究（昭和十四年、満鉄調査課）

⑦ 竹尾式氏、北樵開略（昭和十八年、武蔵野書房）

⑧ 内藤湖南博士、徂山講演集（明治四十年、朝日新聞社）但しこの講演録は、東洋文化史研究（昭和十一年、弘文堂）の中に、日本満洲交通略説と題して収められている。

⑨ 新村出博士、伊勢漂流の事蹟（続南蛮広記、大正十四年、岩波書店）所収。

⑩ 吉野作造博士、露国帰還の漂流幸太夫（大正十三年、文化生活研究会）

① 鮎沢信太郎博士、地理学史の研究 (昭和二十三年、愛日書院) 漂流 (昭和三十一年、至文堂)

岩根保重氏、徳川時代に於ける外国地理関係著訳の概観並に資料の解説 (地理論叢、第四輯)

開国百年記念文化事業会編、鎖国時代日本人の海外知識 (昭和二十八年、乾元社) 等参照。

## 二

しかるに他面において、漂流記のうちのあるものは、今日なおわずかな写本として伝えられるのみで、それも書庫の奥深く埋もれているものがないでもない。いまここにとりあげて若干の解説と考察とをこころみようとする蕃談は、まさにそのような比較的埋もれた漂流記の一つであつて、京都大学附属図書館の所蔵にかかるものである。

しかし蕃談といえども、従来全然知られていなかったというわけではない。たとえば住田正一氏の海事大辞書の漂流記の項には、蕃談の名があげられている。そしてそこには「天保三年奥州人露領漂流記なり」という簡単な説明が加えてある。①しかし後に明らかになるように、この天保三(一八三二)年というのも間違ひであるし、奥州人というのも誤りである。また露領漂流記というのには、半ば説明が不足している。

また山下草園氏の日本布哇交流史には、蕃譚なる書物が引用されている。②これは尊経閣文庫本の蕃譚またはその写本の類から引用されたものかと察せられるが、山下氏の記述には前後矛盾があるのみならず、蕃譚の筆者曼天生とは、幕末の儒者古賀諱堂が時勢をはばかるペンネームであることさえ、わかつていなかった模様である。

さらに平岡雅英氏の著、維新前後の日本とロシアのなかに、蕃談の記述によつたらしい部分がある。しかしそこにもかなり多くの誤りが見出される。③

かようにして蕃談または蕃譚は、従来全く知られていないわけではないが、しかしその認識は誤りや矛盾をふくんでをり、従つて十分には知られていなかったというべきであらう。

私は十数年前に、新村出博士から京大図書館本蕃談三巻の存在を教えられ、当時これを筆写しておいたのであるが、しかも最近に至つて、蕃談の記述に関連するところの二三の史料や記録を、主として北陸において見出すことができた。そこで改めて蕃談を読みかえし、且つそれらの関連史料とともに若干の考察を加え、漂流記蕃談の地位についても私見を述べようとするに至つた。そこでまず順序として、最近に至つて見出したという関連史料について、はじめに説明したいと思う。

その一は、時規物語及び、献上の御時規由来並びに用法之覚と題

する写本である。ともに加賀藩士遠藤高嶽数馬が書いたものである。<sup>④</sup>前者は現に尊経閣文庫に所蔵する絵入りの写本であり、後者はかつて石井研堂氏の異国漂流奇譚集のなかに印刷されたことがある。前者は漂流民達が帰国の後、加賀藩において行われた取調べに際してつくられた記録であつて、漂流の経過や帰国の顛末などを、最も詳細に記述している。後者は漂流民が帰国に際してシイトカ (Saito) の領主から貰つてきた時計を、加賀藩主に献上した経過についての記録である。前者は蕃談と全く同一の内容を詳述したものととして、後者はまた蕃談の附録的な記述として、ともに深い関連をもつものである。

その二は、高岡市立図書館が所蔵する次郎吉物語である。漂流の一人次郎吉が、帰国の後に物語つたところを録したもので、漂流の経過や招来した品物等について記した写本である。絵の挿入もなく、時規物語ほど詳細ではないが、蕃談の記述と関連して考察すべき内容をもつている。蕃談のはじめに掲げられている流寓歸來略述のなかに、「浮海中ノ艱辛ハ某生ノ詳記アリ、故ニ贅セズ。已下皆此ノ例ニ準ズ」とのべているが、この某生の詳記というのは、時規物語または次郎吉物語のことを意味するかと思われる。かようにして次郎吉物語は、時規物語とともに、蕃談の記述に最も深い関連をもつ史料である。

その三は、新湊市新町の近岡家の文書である。近岡家は幕末のころ、中田屋七左衛門とよばれる新町の組合頭の家であつて、この家に所蔵する文書のなかに、漂流民のうち片口屋七左衛門及び中野屋金藏の帰国当時の状況を伝える若干の記録がある。それによれば、片口屋七左衛門の兄嫁、名はむさというものが、天保九(一八三八)年に七左衛門の出身届を提出していたところ、天保十四(一八四三)年に至つて帰国したため、むさが不都合の廉を問われて組才許へお預けになつた事実や、中野屋金藏が帰国の後、塩の小売人として渡世したらしいことも知られる。<sup>⑤</sup>

その四は、富山県水橋町の水橋神社に残された石黒屋権吉の奉納品である。元来権吉は、漂流者ではない。彼は幕末の頃いわゆる松前貿易に従事していた船頭で、天保十四(一八四三)年漂流民達がエトロフ島に送還されてきたころ、あたかもこの北海の地に赴いており、民達に足袋や漂手拭などを贈つてその労をなぐさめ、また漂海中に死亡した人々の法要をいとなんで菩提を弔つた人物である。この石黒屋権吉が、郷里なる水橋神社に奉納した手洗鉢や絵馬額が、いまま同社にあるのを見出すことができた。殊にその絵馬額には、永福丸といういわゆる千石積の船をはじめとして、権吉の持船が波をけつて海洋を航行する姿が描かれていて興味がある。<sup>⑥</sup>

① 住田正一氏、海事大辞書、下巻、二二三頁以下。

② 山下草園氏、日本布哇交流史(昭和十六年、大東出版社)九四頁、一二五頁等。

③ 平岡雅英氏、維新前後の日本とロシア(昭和九年、ナウカ社)

④ 遠藤高球(一七八四—一八六四)の伝記については、日置謙

氏の加能郷土辞彙九八頁参照。またその業績については三上義

夫氏の写法新術及び其著者遠藤高球(史学第五卷第四号)参照。

⑤ 石井研堂氏、異国漂流奇譚集、三九二頁以下。

⑥ 近岡家文書に次のような覚書がある。

覚

片口屋故八兵衛後家

む さ

⑦ 右故八兵衛弟七左衛門義、天保九年富山木町浦平四郎船ニ乗組、異国に漂流罷在、此度送り来り処、右七左衛門先遣而走り人之趣ニむさ心得違ニ而、断書付指上置り義、不都合之趣ニ付、今度御郡所ニ而御糺之上、組才許に御指預ケニ相成りニ付、私共は御指預ケ之段御申渡奉畏申也。何時ニ而も御用次第召連罷出可申也。依而預り書上可申也。以上。

天保十四年閏九月十三日

十人組合 善光寺屋権六

(下略)

当分肝煎弥兵衛殿

頭合頭七左衛門殿

同 久左衛門殿

⑧ 中野屋金蔵に関するものは、近岡家文書のうちに数通見出される。そのうち、嘉永三(一八五〇)年三月のものに、次の通

り記されている。

中野屋勘右衛門弟金蔵、異国漂流人之処、夫々御詮義之上、御引渡之砌、是迄之舟稼御指留、外稼等も無御座りニ付、放生律新町におゐて御塩小売人新株立御願申上りニ付、御算用場表に御違被下り処、元来御塩小売人新株立義ハ容易之御聞届ケ難被為成義ニ得共、今度願越無拠所訊合ニ付、金蔵一代限り御塩小売人新株立御聞届ケ被仰付、先以難有仕合ニ奉存也。尤一代限之事ニテ讓株等相成不申段、御申渡被成、承知仕申也。

(下略)

⑨ 石黒屋権吉奉納の手洗鉢には、正前に広前の二字がほられ、側面に嘉永五壬子正月吉日、海上安全、石黒屋権吉并絵船中とあり、裏面には永福丸権吉、永吉丸権五郎、朝日丸権次郎、安金丸権八、永徳丸権七、永順丸権右衛門等の名が列記されている。また井桁には、奉納、海上安全、石黒屋権吉とほられている。

さらに水橋神社の拝殿に、権吉奉納の額が二つある。一つには奉掛御宝前、天保九年戌三月吉詳日、願主石黒屋権吉敬白とあり、いま一つには奉納、嘉永五壬子年三月吉詳日、奉寄進願主石黒屋権吉敬白とある。ともに船の絵である。また権吉の墓は、水橋町の墓地のなかに見出される。

三

さて関連史料の解説を以上にとどめ、蕃談そのものにかえらう。

京大本蕃談は、上中下の三巻よりなる。① 上巻は流寓帰來略述に当て

られている。すなわち漂民の一人次郎吉の物語るところを憂天生が手録したものであつて、ところどころ場所や外国語について憂天生自身の見解をさしはさんでいる。嘉永二（一八四九）年臘月の日附をもつて、憂天生が書いた序文には、

予邈后漂子前後財五六次。每見必置楯墨。隨譚而録焉。竟積抵三卷。命曰蕃談。

とあつて、この書物の成立の由来をのべている。また同じ序文のなかに、漂民の説くところと洋学家の説との間に出入が多く、必ずしも一致しない点がある。これは新陳因革の差によることであつて、漂民の話が実微の語だからといつて、直ちに信すべきではない。一得一失のあることを忘れてはならぬと、記述内容についての評価をものべているのである。

次いで漂客次郎吉の流寓談を一通り書き終つた後、上巻の最後に、次郎吉の話をきいて得た感想をよんだ憂天生の漢詩がのせられている。一例を英国人と題するすのの一節にとれば、

峩々大船載雄兵。蚕食東西事遠征。云々

とあつて、英国の東洋進出をうたい、これに対する警戒を怠つてはならぬとうたうのである。

蕃談の中巻は、天地・人物・習俗・政教・器財等の目次をかかげて、流寓各地の珍しい自然と人文について述べ、下巻はまた、舟

楫・技術・雜載等の目次に従つて、外国の船舶や技術に関する記述に当てられている。

ところでこの蕃談の筆者憂天生なる人物については、下巻の末尾につけられた跋文に、

蕃談三卷。謹堂古賀博士。聞漂客話。而一昨年録。其隱姓氏。畧以憂天生在。蓋以書中所言。頗涉時政。而有無忌諱也。客加州人。通称次郎吉。云々

とあつて、古賀謹堂その人であることが知られる。そしてこの跋文は、嘉永甲寅の年すなわち嘉永七（一八五四）年雙楳主人夏楯生龍という人によつて書かれているが、この雙楳主人とはいかなる人物なのか、詳にし難い。ただ蕃談のうちに挿入されている挿絵は、雙楳主人の弟にして古賀謹堂の門人である季彦が描いたものであることが、跋文によつて知られるばかりである。

① 蕃談は京大本の他に、前記の通り尊経閣本蕃談があり、日本海文化展覧会目録によれば、北海道庁所蔵本の蕃談がある。

② 古賀謹堂（一八一六—一八八四）は、古賀精里の孫。江戸の儒者。その略伝は、吉田賢輔氏のかいたのが大日本人名辞書第二巻のついている。それによれば、彼は幕府の儒官でありながら、ひそかに洋学にも関心をもつており、そのため世の掣肘をうけたこともある。

四

さて流寓帰来略述並びに次郎吉物語等の記述内容に従つてこの、天保年間における漂流流寓の次第を略述すると次の通りである。

天保九(一八三八)年の四月、富山の西岩瀬の浜から一艘の船が航路を西にとつて出帆した。この船は富山の木町の吉岡屋平四郎の持船で、船の名は長者丸。長者丸には富山藩から大阪への御登米五百石を積んでをり、次の人々が乗り組んでいた。

平四郎(船頭) 越中 富山 木町

八左衛門(船親父役) 越中 射水郡 長徳寺村

善六(表役) 越後 小泊辺り

多三郎(知工) 越中 新川郡 東岩瀬村

次郎吉(水主) 越中 新川郡 東岩瀬浦方

六兵衛(水主) 越中 射水郡 放生津町

七左衛門(水主) 越中 射水郡 放生津新町

金蔵(水主) 越中 射水郡 放生津新町

善右衛門(水主) 越中 富山御領 四方

五三郎(水主) 越中 富山御領 四方

長者丸は大阪で米の陸揚げを終つてから、新潟向けの荷を積んで六月上旬には大阪を出た。そして新潟から北海道松前に赴き、松前

から仙台唐丹の港にむかい、さらにここから松前に帰ろうとして、北上航海を続けていた。

しかるに、長者丸が金華山の沖合にさしかつたとき、それは天保九(一八三八)年の十一月廿三日であるが、はげしい西風が吹き募つて、数日やまない。乗組員のあらゆる努力にもかかわらず、船は暴風に抗し得ずして東方太平洋の洋心にむかつて吹き流される。やがて大津波が起り、このために船体はうち毀されてしまう。帆柱はいうに及ばず、船台から上は残らず海中にさらわれてしまう有様であつた。

これより数十日にわたる太平洋上のあてもない漂流がはじまる。飲料と食料の不足が、毀れた船体にすがる乗組員をなやましたことはいうまでもない。絶望的な精神の苦惱が、彼等を襲つたことももちろんである。かくて乗組員中の三名は、遂に漂流中に死亡する。すなわち四方の五三郎は天保十(一八三九)年正月ごろ、越後の善六と四方の善右衛門が同じ年の三月ごろ、渴と飢えとにたおれてしまふ。残された人々は、空しく神仏の加護を祈るばかりであつたと、後日次郎吉は告白しているのである。

しかし天保十(一八三九)年三月廿四日頃に至り、三本帆柱を立てた一艘の巨船が、彼等に近づいてくるのが見られた。一同はひたすら救助を求め、遂に破損した長者丸を去つて、この異国船に乗り

移つた。ところでこの異国船について次郎吉は、イーヒタ・マレカイ・ナンタケアイラン・セツブ・ゼンロッパ・キヤフン・ケフカルといつてゐる。どうやら東アメリカのナンタケツト (Nantucket) 島に属したゼンロッパ号という船、そしてその船長の名はケフカルだという意味らしい。山下氏によれば、この外国船の名は正しくはゼームス・ドーパー号であり、船長の名はキヤスカートだといふのであるが、アメリカ側の史料による裏付けが見出されるまでは、暫く確言をさしひかえない。

とにかくこのアメリカの捕鯨船に救助された一行は、やがてサンイチのオアへのヘドというところの上陸する。サンイチのオアへのヘドとは、今日のハワイのオアフ (Oahu) 島のダイアモンド・ヘッド (Diamond Head) のあたりと考えられる。もつとも多三郎・八左衛門・七左衛門等は、マウイ (Maui) 島のワイヘ (Waiehe) に上陸したので、オアフ島上陸の平四郎・金蔵・次郎吉等もやがてハワイに集結する。当時のハワイは、いまだアメリカ領に入つておらず、カメハメハ王朝の支配するところであつた。

一行のハワイ逗留は、天保十一(一八四〇)年の七月まで、約一カ年間続く。この間宣教師ベーンナの世話になつたこと、マウイ島の学校なるものを見学した様子、ワイへの港へ阿片戦争に参加したフランスの軍艦が入港してきたことなど、蕃談の物語りは尽きない。

ただ船頭の平四郎は、病を得てこのハワイ滞在中に不帰の客となつたことは一同にとつても深い悲しみであつた。やがて天保十一(一八四〇)年七月、たまたまワイヘに寄港したイギリス商船、その船長はキヤフン・センとよばれてゐるが、これに便乗を許された一行は、航路を西から北へとつて、一旦は日本列島に近づいたのであるが、外国船警備令を出している鎖国の日本に上陸することは、もとより不可能であつた。かくて彼等が連れゆかれた場所は、ロシア領カムチャツカ半島の東岸ウスト・カムチャツク (Ust Kamohsk) であつた。

このカムチャツカ半島における流寓は、また約一ケ年間に及ぶ。そしてこの間における見聞は、兵營の状況、住居の有様、食事の様子などについて語られてゐる。天保十二(一八四一)年六月に至り、ニコライ・メツトルス号というロシア船に乗つて、こんどはロバトカ岬の南端をめぐり、オホーツク海を斜断して、シベリアのオホーツク (Okhotsk) に赴く、そしてこのオホーツクにおける流寓もまた約一年間に及ぶのである。

オホーツクにおける出来事として、注目すべき一事は、彼等がゴロブニンの甥に当るといふペトロ・イワンウイチに会合してゐることである。ゴロブニンは、かつて日本に捕えられたことがあり、高田屋嘉兵衛との交換によつて帰国してから、日本函囚実記をかい

た人として知られている。ペトロ・イワンウインチは、叔父のゴロ  
ーブニンが滞日中、日本人の格別親切な所遇をうけたというので、  
その返礼の意味において心からなる好遇を漂流民達に与えるのであつ  
た。

天保十三(一八四二)年の六月、ロシア船によつてオホーツクを  
出帆した彼等は、再びロバトカ岬の南端を通つて北太平洋に出る。

そしてベーリング海を東行してアラスカの南方シイトカ (SITKA) に  
進出された。当時アラスカはなおロシア領であつて、アラスカが七  
二〇万ドルを以てアメリカにあがなわれたのは、彼等が行つて二十  
五年の後、すなわち一八六七年のことであつた。当時シイトカは、  
毛皮の取引のさかんな町であり、アドフカルロウイチというものが  
その領主であつて、漂流民達はこの領主から多大の便宜を与えられた。

やがて天保十四(一八四三)年に至り、ヤクーツクから日本漂流  
民を帰還せしむべしという命令が、アドフカルロウイチのもとに到着  
したので、三月十日に乗船、およそ六十三日間の航海を経て、五月  
廿三日にエトロフ島に帰着したのであつた。別れにのぞんでアドフ  
カルロウイチは、漂流民達に一箇の柱時計をはなむけとし、船長のエ  
レキサンデルは、銀の匙などの記念品を贈つて、悵然として離別を  
惜しむのであつた。

① この年月日は、蕃談の記述によつた。次郎吉物語は、これを

四月下旬としてゐる。

② 山下草園氏、日本布哇交流史、九四頁。

③ 吉森実行氏、ハワイを繞る日米關係史、一二二頁参照。

④ ゴローブニン、日本幽囚実記、(明治二十七年、海軍文庫)

三頁以下。

## 五

帰国の後漂流民達の労をねぎらつた最初の一人は、前記の石黒屋權  
吉であつた。漂流民達はやがて江戸小石川の春日町なる町宿に送られ、  
ここで当路のきびしい取調べをうけなければならなかつた。取調べ  
が一段落して一応帰村を許されたのは、弘化三(一八四六)年十一  
月のことであつて、これは天保九(一八三八)年の出で立ち以来実  
に八年ぶりの帰郷であつた。翌弘化四(一八四七)年に再び江戸に  
召喚され、最後の取調べをうけることとなる。取調べに際して、異  
国よりもたらしめた絵図の類はことごとく取上げられるが、無難のも  
のは下げ渡されるなどして、嘉永元(一八四八)年に至つて、よう  
やく取調べのすべてが落着く。アドフカルロウイチがはなむけの  
柱時計は、漂流民達の領主加賀藩主に献上されたこと、遠藤高瑋の記  
録が示す通りであつた。

蕃談は、嘉永二(一八四九)年にかかれた古賀謹草の序文をもつ  
ている。謹草が漂流次郎吉に会見したのは、漂流民達の二度目の江戸

滞在中であつて、この会見はひそかに行われて五六回に及んだ。そしてその聞き書が蕃談三巻に編まれたわけである。かねて儒学のみならず、洋学にも心をよせていた謙堂としては、漂流の外国見聞談は是非ききたいところであつたし、またこの会見が彼の洋学への関心を一層刺戟したかも知れない。このような状況にある謙堂として、次郎吉の語る外国の地名や人名に対して自らの見解を蕃談の中に記入したのは当然であつた。

さて蕃談に記された事件の経過等については、以上にとどめることとし、最後に漂流記としての蕃談に関する若干の考察を加えてみたいと思う。

まず第一の問題は、蕃談の叙述方法についてである。江戸時代の漂流記は、漂流の方向その他記述の内容からいえば、それぞれ別個のものをもっているのは当然である。しかし漂流記のすべてを見わたして、その叙述方法の相違を考へるとき、そこにいくつかの型があげられると思う。吉岡永美氏の漂流船舶物語の研究は、これを甲型と乙型とに分ち、かつ両者の折衷型との三種があるとしている<sup>③</sup>。甲型というのは、たとえば水夫長平自筆の漂流日記のように、漂流者自身の記述になるものである。この種のもものは、漂流中の労苦の思ひ出も生々しく、描写が清新で発刺としているが、反面記述者の主観的な誇張や思ひちがいの入る予地があつて、それだけ事実の客観

性とほしいうらみがある。

これに反して乙型は、たとえば大槻女沢が編んだ環海異聞のように、第三者によつて聞きがきされたものであり、送還されるまでの異国異聞の珍奇さに描写の重点を置くものである。乙型はさらに断片的な奇談や異聞を秩序もなく聞き書きしたものと、系統立てて異国の文化を叙し、文明開化に寄与しようとする目的意識の明瞭なものとの二種に細分される。この種のもものは一問一答形式をとるものがあるだけに、のべられた事実の信憑性はある程度大きいけれども、反面描写の迫力に欠けるうらみがあるといふことができる。

ところでこのような叙述方法による分類を、蕃談に適用すればいかかであるか。蕃談は古賀謙堂の聞き書きであり、謙堂は学者として系統立つた編集方法をとつているから、明らかに乙型に属するといふことができよう。尊経閣文庫の時規物語も、この型に属するといえる。これに反して同じ事実を次郎吉が物語つたものでも、たとえば漂流中の苦辛などが生々しく描写されている次郎吉物語は、甲型に属するか、或いはそれに近いといわなければならぬ。

このようにして天保年間における越中漂流の事蹟は、甲乙両種の漂流記を生んでいるといふべきである。

蕃談はもとより漂流自身の筆になるものではない。その点で長平の漂流日記や彦威の漂流記とちがつている。また將軍や藩王の命に

よつて記されたいわば公撰のものではない。公撰でないという点で、桂川甫周の北樺聞略や大槻玄沢の環海異聞と異つてゐる。また時規物語ともちがう。それは当路者の取調べが終つた後、直接漂民と面談することによつて書かれたという点で、船長日記や南海紀聞などの漂流記と軌を一にしている。面談の日数が五六日にすぎないという点では、環海異聞のごとく四十日に及ぶものに比較すべくもない。しかし翁草の中に書かれた遠州船無人島漂着物語のように、又聞きによるものではない。これらの色々な事情を勘案するとき、漂流記全体のうちに占むべき蕃談の地位は必ずしも低いものではないと考えられる。

① 吉岡永美氏、漂流船物語の研究、一九五頁以下。

## 六

次に一言したいのは、江戸時代における漂流の原因に関する論議についてである。吉岡氏は、鎖国時代に漂流船が比較的多かつた理由について、自然的原因と人為的原因とをあげている。すなわち国土が四面環海の海洋国である上に、南からは暖流黒潮の本流支流が北上し来り、北方からはリマン海流が南下して、一は黒潮本流に、一は黒潮支流にぶつかる荒海にとりまかれてゐる。そして陸上は、山と川とが交錯して海への曲折出入が甚しく、多湿多雨で風雨の変

化もまた複雑である。冬季は殊に西風北風がはげしい。これは漂流船を多からしめた自然的原因である。

これに加うるに、江戸幕府の鎖国政策は、大船巨船の製造を禁止し、科学的航海術の発達を抑圧阻害する結果になつた。たとえば、寛永十二(一六三五)年十二月、爾今諸大名百姓町人共、五百石以上の船舶を建造してはならないとなし、さらに龍骨の構造その他造船の要部についても制限を加へている。⑤このような幕府の政策は、江戸時代に漂流船を多からしめた人為的原因をなしたものである。

しかるに長沼賢海教授は、漂流の人為的原因のうちにも、密貿易の意図をもつものがあつたと論じられたことがある。すなわち教授は、その鎖国時代における海外発展と題する論説のなかで、漂流記をとりあげられ、多くの漂流記のうちには随分つじつまのあわない記述をふくむものがあるとして、そこには創作的要素があるのみならず、ときには海外密貿易者が漂流者を装つた場合があつたらしいと論じられたのである。⑥

しかも長沼教授のこの説は、鮎沢信太郎博士にも受けつがれた感がある。すなわち博士の漂流という書物には、鎖国時代の海外発展という副題がつけられている。そして漂流に関する記録は、多くの場合明らかな漂流民であるという形をとつて書き残されている。もちろん密貿易に出て漂流した場合もあつたに相違ない。けれども帰

遷後の漂流の口書からは、その間の真相が語られないのが普通であつたと述べている。<sup>⑥</sup>

さて以上のような漂流の原因に関する諸説を前提にして、具体的に蕃談の長者丸の漂流原因について考えると如何であろうか。少くとも蕃談の場合には、海外密貿易者の漂流を装つたらしい様子などは認められない。よしんば密貿易者であつたとしても、帰遷後の漂流の口書きからその意図を検出することの困難さは、鎖国の当時としては当然予想される。取調べの陳述や第三者に対する談話において、密貿易の意図を明らかにするのは、漂流にとつて自縄自縛の結果をもたらす危険のあることであるから、そのことについては容易に口外しない事情にあると思われる。しかしそのような特殊事情を前提とし、これを勘案するとしても、なおかつ天保の越中漂流の場合に、密貿易の目的があつたと立論することはできない。蕃談の記述も、次郎吉物語の内容も、ほとんど容疑の余地なく、主として自然的原因に基づく漂流であることを認めさせる。従つて少くともこの場合は、密貿易の意図はなく、またいわゆる鎖国時代の積極的な海外発展の例としてあげることのできない場合であると思われる。かようにして、長沼教授や鮎沢博士のいわゆる密貿易者漂流説は、一般的な想像として成立するにすぎず、少くとも天保越中漂流の史料によつてこれを実証することはできない。

- ① 吉岡永美氏、漂流船物語の研究、五〇頁。
- ② 住田正一氏、日本海法史、下巻、二三八頁。
- ③ 通航一覽、異教渡海の部、渡海御免並びに禁制の部。
- ④ 長沼賢海氏、鎖国時代における海外発展（日本諸学研究报告、第十七篇、歴史学）
- ⑤ 鮎沢信太郎氏、漂流、六頁。

## 七

最後に附言したいのは、帰遷後の漂流の消息に關してである。

すでに述べたように、ジョセフ・ヒュは、ハリスの通訳官として日本に未朝した。また土佐の中浜万次郎は、帰国後幕府の御普請格に列し、万延元（一八六〇）年には遣米使節新見正興に従つてアメリカに使した。<sup>①</sup>

かくて彦蔵も万次郎とともに、幕末日本の外交史上にその名をとどめるに至つた。伊勢の光太夫は、ロシア使節ラツクスマンのエカテリーナ号によつて送還され、さまざま珍奇な文物をもたらしたのみならず、幕末における洋学者の集会にも列席して、日本ではじめて太陽暦の正月すなわちおらんだ正月を祝う仲間に加わっている。

彼が自ら書いたロシア文字は、いまに残されている。<sup>②</sup>

蕃談の越中漂流は、ハワイとカムチャツカとオホーツクとシイトカに流寓帰国した。漂流中に三名が死亡し、船頭の平四郎もまたハ

ワイ流寓中に病歿した。生きながらえて帰国した数名の、その後の消息は香として定かでない。ただわずかに、片口屋七左衛門と中野屋金蔵のそれが多少知られるばかりである。それとても七左衛門の兄塚が組預けになるとか、金蔵が塩の小売人になるとかいうような次第であつて、かの彦蔵や万次郎や光太夫の花やかさに比較して、いかにも乏しくさびしい史料しか得られない。

寛永の韃靼漂流者竹内藤右衛門の五輪の墓は、かなり堂々たるものが福井県三国町の性海寺にある。この墓の前には、藤右衛門の三十四回忌に当つて建てられた供養碑も現存している。督乗丸の船頭重吉が建てた遭難船員の供養碑は、いま名古屋の成福寺の境内にある。ともに漂流者の菩提が手厚く弔われた例であろう。

これに反して、天保越中漂民の墓も供養碑もいまのところ明らかでない。わずかに帰還漂民を慰労した石黒屋権吉の奉納品と墓とが北海のほとりの水橋町に見出されるばかりである。

思えば蕃談漂民帰還後の消息は、まことに乏しくわびしいものだというわねばならぬ。彼等がシイトカの領主アドフカルロウイチから貰つて帰つた柱時計は、いまも前田家にあるものかどうか。彼等に

関するアメリカ側またはソヴェット側の史料が、海を越えたかの国にあるものかどうか。それらは今後の研究にまたねばならぬ。

しかしひるがえつて考えるとき、蕃談漂民のような史料の乏しさは、数多い江戸時代漂民の一般的な状況を代表するものではないからうか。彦蔵や万次郎や光太夫のように、帰国後史上に光彩を放つに至るのは、むしろ特殊な場合であつて、弘く世人の注目をあびることもなく、辛酸をなめた身の生涯を終えるというものこそ、江戸時代漂民の大部分ではないであろうか。その点で蕃談漂民は、名もなき民の漂流顛末を代表するものとして、一面花やかな彦蔵や万次郎や光太夫や藤右衛門のそれに対立するものをもつている。

花やかな特殊の反面に、地味な一般がひかえていることを忘れてはならぬ。私はそう考えながら、新村博士の手稿本日本漂流記提要の写しをみるのである。<sup>①</sup>

① 中浜東一郎氏、中浜万次郎伝、尾佐竹猛博士、幕末外交物語、夷狄の国へ等参照。

② 北棧明略及び森銃三氏、おらんだ正月等参照。

③ この提要は、新村博士が心覚えの手控としてつくられたものであるが、私はかつて許しを得てこれを筆写させていただいた。